路地裏

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
路地裏

【Ｎコード】
Ｎ６５１８Ｏ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
明人と春音が公園に行く途中にいつもの道とは違う路地裏に入ってみるとそこは。普段の道とはまた違う道を行くのもいいものです。

第一章

路地裏

明人と春音はこの日お家の前でけん玉で遊んでいました。お母さんにお家の中でしたら危ないからと言われたからです。

その遊んでいる中で、です。不意に春音が言ってきました。

「ねえお兄ちゃん」

「どうしたの？」

「けん玉飽きない？」

それに飽きたというのです。

「もうね。飽きない？」

「そうだね。言われてみればね」

明人も妹の言葉に頷きました。

「ずっとしているから」

「どうしようかしら、それじゃあ」

「お家の中で遊ぶ？」

明人はまずこう提案しました。

「ゲームでもして」

「今面白いゲームないよ」

けれど春音は困った顔で言いました。

「全部クリアしたじゃない」

「そういえばそうか」

「オセロとかトランプもあるけれど」

「じゃあ今はそれする？」

「それも嫌」

首を横に振っての言葉でした。

「何か嫌」

「嫌なの」

「うん、嫌」

何度も言って拒む春音でした。
「他のことしない？何か」
「他のことって言われても」
「ホッピングとか。フラフープとか」
幼稚園でやっているその遊びを言っていく春音でした。
「そんなのない？それで遊ばない？」
「そういうのは幼稚園に行かないとないよ」
「ないの？」
「お家にはないよ」
こう妹に話します。
「残念だけれどね」
「そうなの。幼稚園に行かないとないの」
「幼稚園に行く？じゃあ」
「ううん、いい」
それはいいと返す春音でした。また首を横に振って言うのでした。
「それはいいから」
「そうなんだ」
「とにかく何かして遊ぼう」
「何かって」
「どっか行く？公園？」
そしてです。春音は公園に行こうと言ってきました。
「公園に行く？どうする？」
「公園かあ」
「うん、皆もいるし」
また言う春音でした。
「どうするの？それで」
「そうだね。じゃあ公園に行こう」
明人もその言葉に頷きました。
「今からね」
「ええ、それじゃあ」

「ただね」
ここでまた言う明人でした。
普通に行っても面白くないよね」
「そうね、確かにね」
「普段通る道とは別の道に行こう」
「別の道？」
「そう、別の道を通ろう」
こう言うのです。
「それでどうかな」
「わかったわ」
春音はお兄さんの言葉ににこりと笑って頷きました。
「それならね。今からね」
「行こう。それじゃあね」
「うん、じゃあ」
こうして二人は公園にいつもとは違う道で向かうことになりました。その道は。
路地裏でした。普段の大きな道とは違う道です。そこに入ったのです。
左右に家が並んでその家の壁に左右が囲まれた狭い道です。舗装されてはいますけれど何か薄暗い感じがして小石も多い、そんな道でした。

第二章

春音はその道に入るとです。すぐにお兄さんに尋ねました。
「ここって」
「はじめて入る？春音は」
「こんな道があったの」
これが彼女の返答でした。
「まさかって思ったけれど」
「あるんだよ。僕だってはじめて入ったけれどね」
「お兄ちゃんもなの」
「何か凄い道だね」
こう妹に言います。
「いつもの道とは全然違うし」
「何か出たりするの？」
「ああ、それは大丈夫だよ」
それはないというのです。
「いるとしても猫位だよ。大丈夫だよ」
「そうなの、猫ちゃん位なの」
春音は猫が大好きです。ですからお兄さんのその言葉を聞いてまずは安心したのです。
そしてそのうえで、です。二人で前に進みはじめました。すると。
明人が足元にあるものを見つけました。
「あっ、これって」
「これって？」
「ビー球じゃない。それもこんなに一杯」
足元にビー球が一杯転がっていたのです。誰かが捨てたものみたいです。
「凄いよ、色々なビー球があるよ」
「本当、どれもとても奇麗」

「そうだね、拾おう」
二人はこう言い合ってそのうえでビー球を拾います。もうズボンのポケットもスカートもそれもパンパンになっています。ビー球で一杯です。
全部拾って満足してです。二人はまた先に進むのでした。
「よし、じゃあまた行くか」
「そうね」
春音が明人の言葉に頷きます。
「それじゃあまた先に」
「もう少し先があるから」
明人は妹に対して述べました。
「けれど一直線の筈だから」
「歩いていけば着けるのね」
「うん、大丈夫」
こう妹に対して話します。
「少しずつ行けばね。ただ」
「ただ？」
「何が出るかわからないかな」
周りを見回しての言葉でした。
「ここはね。暗いしね」
「そうね。結構暗いわね」
「日が入りにくいからね。そう思うと少し怖いかな」
「そうかも」
お兄さんの言葉にです。春音は困った顔になります。実は少し怖くなっていたのです。
そしてそのうえで、です。また話すのでした。
「じゃあもう引き返す」
「ああ、大丈夫だよ」
「大丈夫なの？」
「春音の傍にずっといるから」

こう妹に言うのでした。
「だからね。安心していいよ」
「お兄ちゃんずっと一緒にいてくれるの」
「一緒にいるよ。何があってもね」
「いてくれるの。だったら」
「先に行こう」
明人はまた言いました。
「最後までね」
「わかったわ。それじゃあ先に行こう」
「うん、これからね」
こうして二人は先に進むのでした。道は確かに少し暗いです。それでも先に進んでいきます。やがてその二人の前にまた何かが見えてきました。
それはカードでした。二人がいつも遊んでいるカードです。それが道の端に落ちていたのです。
「カードよ、お兄ちゃん」
「うん、そうだね」
明人は春音の言葉に頷きました。見れば道の端に何枚も落ちています。
それを見てです。明人は驚きながらいいました。
「凄い珍しいカードばかりだし」
「そうよね、何であんなのが落ちてるのかしら」
「誰かがいらなくなって捨てたんじゃないかな」
明人は首を傾げながらこう言いました。
「それでじゃないかな」
「それでなの」
「多分ね」
はっきりとはわかりません。しかしでした。

第三章

そのカードを全部広いました。二人で半分ずつ分けました。
明人はここで、です。春音に対して言いました。
「好きなカード全部あげるよ」
「全部なの？」
「半分こだけれどね。好きなカードは全部言って」
こう妹に顔を向けて言うのでした。
「全部あげるから」
「いいの？お兄ちゃんだって欲しいカード一杯あるのに」
「それは御前だって同じじゃない」
にこりと笑ってこう言うのでした。
「それは一緒じゃないか」
「一緒なの」
「だからさ。好きなカードを言って。ただし数は半分こだよ」
「うん、じゃあ」
お兄さんのその言葉に頷いてです。そうしてカードを選びます。
けれどそれは途中で終わったのです。
明人はそれを見てです。目を少し丸くさせて妹に尋ねました。
「まだ半分いってないじゃない」
「けれど欲しいカードは全部貰ったから」
こう言うのでした。
「だからもういいの」
「いいの」
「そう、後は全部お兄ちゃんが持って」
お兄さんへの言葉です。
「それで御願い」
「後は僕が全部持っていいの」
「そう、いいから」

また言うのでした。
「だって欲しいカードは全部貰ったから」
「そう、だったら」
明人もにこりと笑って春音の言葉に頷きました。そうしたのです。
こうして拾ったカードを分け合ってです。さらに先に進みます。
そしていよいよ出口でした。
「もうすぐだよ」
「公園に出られるのね」
「そうだよ、ほら、明かりが見えてきたよね」
「うん」
見ればその通りです。先が出口みたいになって明るい光が差し込んでいます。少し暗い道からそこに出られるのはその光を見てすぐにわかったのです。
「じゃあもうすぐ公園ね」
「そこを出たらすぐだよ」
明人は妹に顔を向けて言いました。
「もうすぐだよ」
「もうすぐなの」
「何か一杯いいものが手に入ったけれどね」
「そうよね。こんなにいいことがあるなんて」
「よかったよ。ただ」
「ただ？」
春音はお兄さんの言葉の調子が変わったことに気付きました。
「どうしたの？お兄ちゃん」
「うん、最後も何かあったらいいなって思ってね」
こう春音に対して言うのでした。
「何かね。あったらいいよね」
「そうよね。何かあれば」
「面白いよね」
「そうだよね」

そう話をするのでした。そしてその出口の傍に来るとです。
まずは右の壁の上に一匹、そして左の壁に二匹でした。
電柱の傍にもいますし二人の足元にもです。何匹もいました。
「あっ、猫ちゃん達よ」
「そうだね」
二人で話すのでした。
「何か一杯いるし」
「見て、この黒い猫ちゃん」
春音は自分の足元でごろごろと寝転がってお腹を見せている黒猫のところにしゃがみ込みました。そしてそのうえでその身体を撫でて言うのでした。
「凄く可愛いわよ」
「こっちのシャム猫は奇麗だしね」
シャム猫は壁の上にいました。そこから二人を見下ろしています。明人はそのシャム猫を見ているのです。
「まさかここに集まってるなんて」
「最後の最後まで。楽しかったわね」
「うん、こんなこともあるんだね」
明人は明るい言葉で言いました。
「本当にね」
「ねえお兄ちゃん」
春音は相変わらず猫を撫でています。
「またこの道。入る？」
「どうかな。一回だからいいんじゃないかな」
「一回だからなの」
「ビー球とかカードとか滅多に手に入らないよ」
こう妹に話すのです。明人も足元にいる子猫の頭を撫でています。
「たまたまだろうし」
「たまたまなの」
「うん、けれど楽しかったね」

このことはしっかりと言うのでした。
「とてもね。楽しかったよね」
「うん、とてもね」
春音はにこやかに笑って答えました。
「私こんな楽しかったこと久し振りよ」
「けれどもっと楽しくなることも出来るよ」
「もっとなの？」
「皆のいる公園に行こう」
妹をこう言って誘うのでした。
「公園にね」
「うん、じゃあ」
二人は猫達の見送りを受けて公園に向かいました。何気に入ったその路地裏で思わぬ冒険をしてそのことに満足しながら。明るい公園に入るのでした。

路地裏　　完

２０１０・５・４

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6518o/

路地裏

2010年11月1日22時25分発行